第 20 講　実存主義

1　実存主義の先駆

「実存」とは, 現実の自己の存在（＝今ここにいる私自身）という意味。人間は, 資本主義が発達した 19 世紀半ば以降，果たして良い状態にあるといえるだろうか？　という疑問から，個々の意識を変革することによって人間性を取り戻そうとする思想が登場した。これを，**実存主義**という。

※実存主義は，発達した資本主義下における「人間疎外」状態を社会の変革なしに克服しようとした点が，社会主義と異なる。

※実存主義は, 人の理性そのものを疑う考えが背景にある。実存主義者たちは「人間がめざしてきた近代市民社会は必ずしも理想とはいえない」と考えていた。

①キルケゴール（1813 〜 55 年）→有神論的実存主義の先駆

A　人物

デンマークのコペンハーゲンに生まれる。かつて父が神を呪ったことや，父と母が結婚前に愛人関係であったことを知り，自ら「大地震」と呼ぶ絶望と自己嫌悪を感じる。若くして婚約したが，のち一方的に破棄し，研究と執筆に生涯没頭する。42 歳の時, 路上で昏倒（こんとう）して死んだ。主著『**あれか, これか**』『**死に至る病（やまい）**』。

B　ヘーゲル哲学を批判

一人ひとりの人間は, ヘーゲル（独）の言うような「絶対精神」「世界精神」に操られ生きているわけではない，とした。

※また, 正と反を合に止揚する弁証法も「あれも，これも」だと批判した。

C　**主体的真理**の追究

そもそも主体は自分自身なので，真理や道徳は，人類全体でなく個別に考える必要がある，とした。

※誰にとっても成り立つような普遍的･客観的な真理ではなく, 自分にとっての真理，自らがそれのために生き，死にたいと願うような**主体的真理**を追究した。

※「私にとって真理であるような真理を発見し，私がそれのために生き，そして死にたいと思うようなイデー〔理念〕を発見する」という言葉を残した。

D　**実存の三段階**→主体的真理を求める実存のあり方

　1　**美的実存**

　　「あれも，これも」と感性的快楽を追い求める第一段階。

　　※「あれも，これも」統一してしまうヘーゲルの弁証法を批判。

　2　**倫理的実存**

　　そのような生き方に**絶望**したとき，**「あれか，これか」**と正しく判断しようとする第二段階。

　3　**宗教的実存**

　　しかし，結果的に欲望に負けて**絶望**し，**理性を超えた信仰へ飛躍**する第三段階。

　　※絶望は，「死に至る病」だとした。

E　神の前に立つ**単独者**

このように，**自己を見失い絶望する人間は，信仰への決断によって本来の自己を回復できる。**人間は，主体的真理を求め絶望を繰り返し，自らの罪深さを自覚しながら神の前に独り立って生きるしかない，とした。

②ニーチェ（1844 ～ 1900 年）→無神論的実存主義の先駆

A　人物

ドイツでプロテスタントの牧師の子として生まれる。24 歳でスイスのバーゼル大学の古典文献学教授となり，その後，遺伝的な頭痛に悩まされ，34 歳で退職。苦しみながら思索と執筆に励むが，44 歳の時，イタリアの路上で昏倒する。以後，正気を失ったまま精神病院で入院生活を続け，56 歳で死去。主著『**ツァラトゥストラはこう語った**』『**悲劇の誕生**』『善悪の彼岸（ひがん）』『力への意志』。

※理性主義の哲学に対し，生存への意志を強調したショーペンハウアー（独）の著書の影響を受けた。また，ワーグナー（独）の音楽に心酔し，親交があった。

B　**力への意志〔権力への意志〕**

人間には本来「より豊かに，強く，高く，多く…」と成長を望み，力強く生きようとする能動性が宿っているが，キリスト教の道徳がそれを抑圧したとした。道徳観の根底には，弱者が**ルサンチマン〔怨恨（えんこん）〕**に基づき強者の勝利を貶（おとし）め間違いだと位置付け，自らの地位を正当化し高める狙いがあるとし，これを**奴隷道徳**と呼んだ。

※ニーチェは，力への意志は森羅万象（しんらばんしょう）に宿っていると考えた。

C　「**神は死んだ**」→『ツァラトゥストラはこう語った』より

反キリスト者として，近年は奴隷道徳に意味や権威などないことが暴かれた結果，信じる価値や生きる目的・意義もないとする**ニヒリズム〔虚無（きょむ）主義〕**が広がった，と考えた。

しかし人間は，絶えず自己を超えようとする「力への意志」の実現をはかることで，生きるための新たな価値を創造できるとした。

※19 世紀のヨーロッパは，自然科学の発達に伴ってキリスト教信仰が影響力を失っていった時期であった。

D　**永劫回帰〔永遠回帰〕**

ニーチェは，現実の世界は無意味なものが目的もなく永遠に繰り返されるとし，そこにニヒリズムの極限を見た。しかし，「力への意志」に従って生きれば自身の生は肯定できる，と考え，このとき生じる自己の運命への愛を**「運命愛」**と呼んだ。

※運命愛を実践できる人間を**超人**と呼び，キリスト教信仰を捨て，これをめざすべきと説いた。

※超人は，無意味と思える運命でも**「これが人生か，さらばもう一度」**と受け止め，全てを肯定し，力強く運命を愛することができるとした。

２　実存主義の発展

①ヤスパース（1883～1969年）→有神論的実存主義

A　人物

ドイツの銀行家の子として生まれる。はじめ法学，のち医学を学び，精神科の大学で教える。その後，マックス＝ウェーバー（独）の影響を受けて哲学を研究，教授となる。ナチ党にユダヤ人の妻との離婚・絶縁を勧告されたが拒否，免職となるも研究を続ける。戦後はスイスに移住して大学教授となり，国際政治･国際平和などを研究，講演も活発に行った。主著『哲学』『**理性と実存**』。

B　**限界状況**

人間は，**死・苦悩・争い・責め〔負目（おいめ）・罪（つみ）〕**という４つの，自分の力では避けることのできない状況に直面し，絶望や挫折を経験することがある。

※人間は，そのとき自己の**有限性**を自覚するが，ヤスパースは，これを直視することによって自己や世界を超えて包み込む「**神**」のような**超越者（ちょうえつしゃ）〔包括者（ほうかつしゃ）〕**に出会い，実存に目覚めるとした。

C　**実存的交わり＝愛しながらの戦い〔愛の闘争〕**

真の実存に目覚めることは独りでは不可能で，やはり実存に目覚め，真の自己をめざす他者が必要である。互いが素直に自分をさらけ出し，誠実に自己を探究し合うような交流によって，初めて目覚めは可能になる，と考えた。

※「彼が彼自身でなければ，私は私自身にはなりえない」

※そして，交流を進めるのに大切なのは**理性**だと説いた。このような「**実存的交わり**」は，愛と理性をもって真摯（しんし）に他者と向き合うことであるから，これをヤスパースは「**愛しながらの戦い**」と呼んだ。

D　戦間期の哲学者

ヤスパースは，第一次世界大戦（1914～18年）と第二次世界大戦（1939～45年）という，大きな「限界状況」を体験している。そのような戦間期に生きる同時代の人々にとって，真の実存に目覚めるための彼の哲学は，生きる希望となる思想であった。

②ハイデッガー（1889 ～ 1976年）→無神論的実存主義

A　人物

ドイツでプロテスタントの牧師の子として生まれる。初め神学を学ぶが，キルケゴールの著書に影響を受け，さらに**フッサール（独）**から**現象学**を学び，哲学の大学教授として活動する。のちナチ党に入党し，フライブルク大学の総長となるが，党に失望し翌年辞任。戦後は戦争協力責任を追及されるが，もと恋人の政治哲学者**ハンナ＝アーレント**の尽力もあり復職した。主著『**存在と時間**』『形而上学(けいじじょうがく)とは何か』『ヒューマニズムについて』。

※現象学とは，世界が存在すると素朴に信じる「自然的態度」を変更し，世界の実在性についての判断を中止して（＝エポケー〔判断中止〕）内面の純粋意識に立ち返り，そこに現れる現象をありのままに記述する，という考え方。

B　人間＝**現存在(げんそんざい)**

ハイデッガーは，「**存在**とは何か」という古くからの哲学問題を改めて問い直そうとした。そのためには，まず「人間とはどのような存在か」を問題としなければならないとし，この**存在の問い**を発することができるのは人間のみ，と考え，特別な存在である人間を**「現存在〔ダーザイン〕」**と呼んだ。

※現存在としての人間は，他者とのさまざまな関わりの中で生きる存在でもあるので，「**世界―内―存在**（＝世界の内にあって存在している）」と表した。

C　**ひと〔世人(せじん)，ダス＝マン〕**→「現存在」と対立する概念(がいねん)

世の中の出来事に心を奪われ，何となく生きる日常生活に埋没した本来的ではない人間のあり方を，**ひと〔世人，ダス＝マン〕**と呼んだ。

※こうしたあり方から本来の自己へと至るには死を直視することが必要と考え，人間は「**死への存在**〔死に臨(のぞ)む存在・死へと関わる存在〕」でもあると定義した。そして，自分の死への自覚をもち，積極的に身を投げる（＝**投企(とうき)**）ことが重要だとした。

※人間がつねに，すでに存在の中に投げ入れられているという根源的な事実を**「被投性(ひとうせい)」**と呼んだ。

D　**存在忘却(ぼうきゃく)**

ハイデッガーは，近代の科学技術のあり方も考察し，人間も含めたあらゆるものが，技術に利用する材料とみなされていることを批判した。このような状況では，**人間は「存在」というものを忘れ，「存在とは何か」を問うこともなくなる**，と考えた。

※こうして人間が拠(よ)り所(どころ)を失うことを，**故郷(こきょう)の喪失(そうしつ)**と呼んだ。

③サルトル（1905～80年）→無神論的実存主義

A　人物

フランスで生まれ，２歳で父を亡くす。高等中学校の教師を務め，20歳代後半でドイツに留学し，フッサールやハイデッガーの講義を聴く。第二次世界大戦中は，フランスで反ファシズム運動に参加し，戦後は哲学者**メルロ＝ポンティ**らと雑誌を創刊。『異邦人』『ペスト』を著した実存主義の作家**カミュ**とも交流した。小説・脚本などの著述家，平和運動家として長く活動，晩年，ノーベル文学賞を辞退したことは話題となった。主著『**存在と無**』『実存主義はヒューマニズムである〔実存主義とは何か〕』。

※『第二の性』の著者で，「人は女に生まれるのではない。女になるのだ」という言葉を残した文学者・哲学者**ボーヴォワール（仏）との契約結婚**を生涯続けたことでも有名。

B　**「実存は本質に先立つ」**

サルトルは，**自由**という観点から人間の本質的なあり方を考えた。事物（例：消しゴム・自転車）には，本質（例：消す・人を乗せ走る）が実存に対し先に与えられている（＝即自存在）。しかし，人間の場合は，まず先に実存し，（サルトルの考えだと神は存在しないので）自らの意志で自由になりたいものになれる（＝対自存在）。

C　人間＝**投企的存在**・対自存在

人間は自己の可能性を信じて自由に行動を企てる存在であると考え，どんな行動についても，その決断や結果については自己責任を負わなければならない，と主張した。そしてこの状態を**「人間は自由の刑に処せられている」**と表した。

D　**アンガージュマン〔社会参加〕**

サルトルは，責任は，自己のみではなく人類全体に対しても負うもの，と考えた。

※人間は独りで存在しているのではなく，他者との関わりの中に存在しているものだ，とし，積極的に社会に関わることを重視した。

〈 ***Note*** 〉

第 20 講　倫理確認テスト

1　デンマークのキルケゴールが，現代において「死に至る病」と定義したものは何か？

①　実存　②　主体的真理　③　絶望　④　単独者

2　ニーチェの著書としてふさわしくないものを一つ選べ。

①『あれか，これか』　②『ツァラトゥストラはこう語った』

③『悲劇の誕生』　④『力への意志』

3　ニーチェがめざすべきとしたものは何か？

①　永久平和〔永遠平和〕　②　自由放任主義

③　社会革命　④　超人

4　ニーチェ，ヤスパース，ハイデッガーはどこの国の出身か？

①　オランダ　②　ドイツ　③　イギリス　④　フランス

5　ヤスパースは「神」をどのような存在として定義したか？

①　超人　②　超越者〔包括者〕

③　最大で最後の預言者　④　単独者

6　ハイデッガーらに大きな影響を与えた，現象学の創始者とは？

①　コント　②　フィヒテ　③　フッサール　④　ベンサム

7　ハイデッガーは，世の中の出来事に心を奪われ日常生活に埋没した，本来的ではない人間のあり方を何と定義したか？

①　境界人〔周辺人，マージナル＝マン〕　②　現存在

③　ひと〔世人，ダス＝マン〕　④　死への存在

8　ハイデッガーの著書としてふさわしくないものを一つ選べ。

①『存在と無』　②『存在と時間』

③『形而上学とは何か』　④『ヒューマニズムについて』

9　サルトルの言葉としてふさわしくないものを一つ選べ。

①「実存は本質に先立つ」　②「人間は自由の刑に処せられている」

③「アンガージュマン」　④「神は死んだ」

10　サルトルとの契約結婚を生涯続けた『第二の性』の著者とは？

①　カミュ　②　マーガレット＝ミード

③　ボーヴォワール　④　ハンナ＝アーレント

解答

1	③	2	①	3	④	4	②	5	②
6	③	7	③	8	①	9	④	10	③